魂ふる日

岡松和夫

文藝春秋刊

魂(たま)ふる日　奥附

昭和五十五年四月二十日　第一刷

定価　一、四〇〇円

著者　岡松和夫(おかまつかずお)

発行者　杉村友一

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三—二三　郵便番号一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二一一

印刷　共同印刷　製本　矢嶋製本　製函　加藤製函

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

©Kazuo Okamatsu 1980　Printed in Japan

目次〈魂（たま）ふる日〉

第一章　丘の下の家 —— 5

第二章　街の中へ —— 59

第三章　傷心 —— 131

第四章　海の風 —— 183

装幀　岡本半三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

純文学
長編小説

魂ふる日

初出誌　文學界昭和54年1月号〜同年12月号に連載

第一章　丘の下の家

一

朝倉康と妻の奈保子は、結婚披露の宴が終ると、そのまま皆と別れて、荻窪駅から中央線の電車に乗り込んだ。奈保子の母親の信仰している教会で式を挙げ、披露も教会の集会室を使った簡単なものだった。仲人は奈保子が教えを受けていた俳人夫妻がしてくれた。披露の席に来て貰った人に出したのは、折詰弁当と果物とジュース類だけで、アルコール類は一切教会の方から禁じられた。

中央線で東京に出て、横浜まで横須賀線に乗り換える。二人で暮す横浜市の間借は、横浜駅か

ら更にバスで四十分かかった。生活に必要な荷物は何日か前に送っていたから、康も奈保子も手に提げているものは、いくらもない。それでも二人はここ数日の準備と今日の挙式で疲れていたから、快活に喋りあうこともなかった。

間借は、四月初めから康が講師として勤めることになる私立学校の古い卒業生の家で、そこを学校に紹介して貰っていた。広い庭が気持よかった。部屋の方は庭と正反対に採光の悪い六畳間だったが、その後転々とした横浜市内のアパートや貸家に比べると、一番堂々としていた。家も庭も贅沢ではなかったが、いかにも昔ふうな鷹揚な広さを持っていた。

家主の老夫妻は南向きの座敷に暮していて、広い土間になっている炊事場の片隅に、康たちは石油コンロを置かせて貰った。御飯はカマドで炊き、風呂は五右衛門風呂で暮している老夫妻には、石油コンロが珍しかったようだ。そういう場所に、二人で移ってゆくのである。それは自分たちで望んだ結果だが、確かに暮してゆけるのかどうか、不安もあった。収入は、康の高校講師の手当と、まだ籍を置いている大学院の育英資金だけである。奈保子も働く気でいるが、すぐ職があるとも思えなかった。しかし、若い人間の常として、康も奈保子も、気持は呑気だった。

横浜駅前から、康は今日で三度目のバスに乗る。奈保子の方は所帯道具を運んだ日に一緒に連れていっただけだから、二度目になる。

バスは神奈川県庁の近くで右折して、伊勢佐木町の裏になる電車通りを走って磯子の方に出て行く。それからは一直線に海岸近い路を南に下ってゆく。康は横浜に暮すようになると決めた時に市の地図を買いこんで、凡その地形などは頭に入れていた。繁華街の伊勢佐木町辺りが明治の

埋立地であること、そのせいか、いくつもある運河の水位が満潮の時に岸から手の届くほど高くなることなどを興味深く見ていた。

しかし、二人の暮す場所は市の南のはずれの方で、風景はまた変った。バスは丘の迫った海岸線を、海風に吹かれながら走る時もあった。

「きれいな海の色」奈保子は呟く。

波の寄せる砂浜の景色に見とれているようでもあり、また、心細さが、そんな言葉になったのかとも思われた。

「今晩は、夕飯を作ることはないから」

そう云うと、奈保子は頷いた。

康の持っている風呂敷包のなかには、今日の披露宴に用意した折詰の余分が二つ入っていた。昼と同じものでも、奈保子はこれで助かると康は考えた。もし最初の夕食として余りに粗末に見えるなら、折詰の御飯はふかし直し、エビフライのようなものは薄味で煮直せばよい。

二人の間借はバス停から二、三分歩けば着いた。小家がちの細路の突き当りに広い庭のある家が見えて、すぐ後から丘の樹々が高く覆うように伸びている。そこだった。夕日は丘のむこうの海に沈むから、辺りは一段早く夕暮が来る気配で、少し前に見た海はまだ随分明るかったのにと康は思った。右手の座敷にも、左手の炊事場にも、燈はついていない。トタンの黒々とした屋根を持つ家が、ひっそりと見えた。康が勤める予定の私立学校の卒業生である老女は、トタンのことが気になったのか、関東大震災で瓦葺（かわらぶき）は危ないと分ったのでと、前に康が訪ねた時に説明した。

この老女は奈保子の運び入れた少しばかりの家財道具にも注意深く、桐の箪笥を指先で触ってみたりした。その箪笥は新品ではなく、奈保子の家の古い箪笥を削り直したものだった。

「御免下さい」

康は玄関の戸をあけると、大きな声を出した。丘の上に地所があって、そこを畑にしていると聞いていたが、畑は藤岡老人の仕事のように思えたので、老女だけは少なくとも家のなかだと康は考えていた。

座敷の方から廊下を渡る足音が玄関先にも聞えてきた。

「いらっしゃい」藤岡老人が愛想よい笑顔で、二人を見た。

「いらっしゃいませ」老女が脇にぺたりと坐りこんでいた。

結婚式を終えた康と奈保子を藤岡夫妻は迎えて呉れたらしいが、例のように老女の方は好奇心も見せていた。新婚旅行にも行かないで間借に来た二人は、やはり珍しいのかも知れなかった。

「これからお世話になります」

奈保子が挨拶すると、藤岡老人は大きな眼で頷いてみせるだけで、老女の方が、

「どうぞ、どうぞ」と云った。

二人の借りた六畳は玄関を上るとすぐの正面の部屋で、廊下や炊事場側とは襖で仕切られている。その部屋は、もう電燈をつけずにおれない暗さで、康がスイッチをひねると、黒々とした古い天井が眼一杯に映った。やはり、寂しい感じがした。

老女は炊事場で仕事を始めている。そこに、奈保子が洋服を着替えないまま手土産を持ってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

った。

老女が大きな声で礼を云っている。その間に、康は部屋で炬燵の用意をした。三月に入っていたが、まだ寒かった。

奈保子は、すぐに戻って来なかった。立ち話をしている。

「風呂が沸いたら、あんた方、お入りなさい」藤岡老人の声もした。

「いいえ。私たちは銭湯に行きますので」

「銭湯は遠いし、年寄二人だけでは勿体ないからね」

老女も勧めた。二人は普通の間借人のようではなく応対されている。やはり、有難い感じがした。

康は炊事場の方には出て行かず、服を着替えた。そこに奈保子が戻ってきた。

奈保子は康の脇に坐って、

「今すぐ、お茶を入れるわ」

奈保子は疲れた表情だが、気だけは張りつめている。その感じがよく分った。

康は炬燵に入って横浜市の地図を拡げた。何度も見て、バスの路筋は凡そ頭に入っているが、車掌の云うバス停の名前などは、まだ馴染まなかった。それを覚えてみようとした。

奈保子もスーツのまま隣に入ってきた。

「着替えないのか」

「もっと、後で」

奈保子は、今夜は老夫妻と普段着で話し合う気になれないらしかった。
奈保子は立ち上って薬罐を取りに行く。炊事場では、また一言二言老女と話している。康たちの借りた六畳と、土間になっている炊事場の間には、もう一間部屋があったが、声はよく康の所まで響いてきた。
「お爺さんとお婆さんは、食事の時だけ隣の部屋を使いますけど、普段は炊事場への通り抜けに使っていいですからね」
「はい」奈保子が老女に応えている。
「お風呂の時も、ちょっとね。入口があの部屋にあるから」藤岡老人の声だ。
奈保子はそれにも礼を云って戻ってきた。康は奈保子の顔を真正面から見た。眼が素直に笑って、老夫妻の好意を真直ぐに受け入れていると思った。間借なのだから、そうでなくては困るのだとも思った。
茶箪笥から湯呑を取り出して、奈保子は茶の仕度をした。桐の箪笥と茶箪笥が主な家具で、洋箪笥などはない。康の背広もハンガーに吊して鴨居に掛けている。あと、目立つのは本で、荷物の少なさに驚いたらしい老女も、「やっぱり先生ですね、本が多い」と引越の日に云った。
「私たちの夕食、どうします」
「まだいいよ。それより少し休んだらいい」
それでも奈保子は、一休みすると、提げてきた荷物を開いて片づけものを始めた。そのなかからは、祝いに貰ったらしい備前焼の夫婦茶碗や塗箸なども出てきた。煮干もあった。そういう細

ごまとしたものを、チャブ台に載せていった。用事はきりなく、あるように見えた。
その日、奈保子は老夫妻に勧められても、風呂には入らなかった。生理が始まっていた。
康は一人だけ、板を沈めて上に乗る五右衛門風呂に初めて入った。古い鉄釜は手で触れると、ひどくざらついたが、堅牢で、珍しかった。

二

翌日の昼、康の兄が訪ねてくることになっていた。兄は東京の親戚に泊って、康の結婚の親代りをつとめ、明日は郷里に帰ってゆく。康の両親は早く死んでいたから、兄は康の面倒を見てきたが、康が去年の暮帰郷して持ち込んだ奈保子との結婚話は、兄をやはり驚かせたようだった。それでも、反対の言葉は何一つ口にせず、康の希望通りに、奈保子の両親宛に手紙を書き、今度上京して、結婚式の前日に奈保子の両親にも会って呉れた。結婚式の費用は折半だったが、それも兄が持った。
両親の消極的な態度を押し切るようにして康と結婚した奈保子にとっても、康の兄は恩人と云ってよかったから、奈保子は翌朝早くから康の兄を迎える仕度をした。
「魚屋だけは、あなた、行って下さる」
前夜奈保子から頼まれていたので、康はバス停にして一つしか離れていない商店街に出かけた。魚屋には、今朝とれたシャコを湯掻いたのがあって、それと刺身を買いこんできた。

「お兄さんが見えると話したら、お婆さんが座敷をお使いなさいって」炊事場の石油コンロの前に立っている奈保子が云った。

同じ炊事場のなかにいる老女が、

「大事なお客さんでしょうから」

と康にも勧めた。

「今、お爺さんが掃除をしているはずだから、後で見に行ってごらんなさい」

上機嫌な老女は、康の買ってきた魚を覗きこんだ。

「シャコは地のものだから悪くありませんよ」

老女は石油コンロ一つを操って煮物などをしている奈保子の傍から離れがたそうにしていた。

「そのハスはどうした」

康は鍋の中を見て云う。

「一昨日、買っておいて、持ってきたのよ」

「後は」

「里芋を煮て、お吸物を作って、それから御飯をたきます」

「漬物はうちのを差し上げますよ」老女が云った。

「足りないものがあれば、何でも云って下さいよ」

老女は奈保子の脇を歩き廻るようにして、心残りな表情で庭に出ていった。

「お爺さんに庭の掃除も頼まなくては」

老女がいなくなると、奈保子は康の顔に、やはり笑いかけた。
「お皿が足りそうにないの。紅茶の皿でもいいかしら」
「思い切って借りたら。その方が喜ばれそうだ。変なものを使うよりね」
「そうね」
奈保子も納得したようだった。
康は六畳間に戻る。部屋は丘の迫った裏庭からの光しか射さないから、昼間も薄暗かった。康が炬燵に入っていると、
「ちょっと来てごらんなさい」と襖を細くあけて老女が呼ぶ。
康は立ち上って老女に付いていった。廊下を渡って座敷の建物に入ると、そこが康と奈保子の暮す六畳や炊事場よりは、ずっと、しっかりした建物であることが分った。老夫妻は左手の方の部屋を寝室にしているらしい。前庭に突き出した右手の部屋は陽も射し込んで、床の間付きで、八畳の広さがあった。そして中心に、しっかりした欅の応接台も置かれていた。
藤岡老人は床の間に書軸を掛けている。
「滅多に使わないものだから、こういう時に役に立つのは有難いんですよ」
老人は康の気がねした気分を軽くするように云った。老女の方は作業用らしいズボンをはいて身軽に動く藤岡老人に、満足そうにしていた。
軸は分りやすい楷書で、康にも紅霞碧靄籠高低芳草野花一様春と読めた。康は老夫妻に礼を云って、座敷からの庭の眺めを褒めた。梅が咲き残って、春の陽射に淡く浮かぶ感じで見えた。そ

の下の地の水仙は、もう花もない。部屋の空気はガラス戸越しに射し込む光に暖まっている。
「昼頃には、陽射がぐっと入ってくるから暖房は要らないでしょう」老人が云った。
康は自分たちの質素な結婚のことを考えると、この座敷は贅沢すぎると思った。また、これなら康の前途を気遣っている兄が喜ぶだろうと考えた。
兄は約束通り横浜駅に着くと電話をかけてきた。康は時間を見はからってバス停に行くと、暫く待ち、兄を連れて戻ってきた。
康は庭に老夫妻がいたので、兄を紹介した。奈保子は玄関で兄を迎えた。兄は上機嫌で「いい家だ」と云った。
康は二人の間借の薄暗い六畳を兄に覗かせ、すぐ座敷の方に連れていった。
奈保子が炊事場からお茶を運んでくる。兄は一昨日実家で普段着姿の奈保子に会い、昨日は教会でウェディング・ドレスを着た奈保子に祝いを云ったが、今日が一番注意深く見ているようだった。
「いや、どんな暮しをするのかと思ったんだが」
「今日はね、特別にこの座敷を貸して貰っているんだから」康は正直に答えた。
「親切にして頂いております」奈保子が脇から云った。
「やはり、お前の勤める学校の卒業生だからだろうな」
奈保子が座敷から出て行くと、兄がカバーをかけた本を康の方に渡した。
「こんな本、お前たちはもう読んでいるのかも知れんが、会社の人が勧めるものだからね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.